OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	癌と闘う
Author(s)	小塚, 隆弘
Citation	癌と人. 2000, 27, p. 17-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23796
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

癌と闘う

小塚隆弘*

病気になった際に患者がその病態を知って，どのような治療法を選択するか，すべて主治医から知らされるべきであると言う主張，いわゆるinformed consentが叫ばれて久しい。殊に，癌のように悪性の疾患では，それが出来た場所によって，あるいは，性質によって，すべて予後がよいとは限らず，場合によっては人生の最後を覚悟しなければならないことも，残念ながら，あり得る。治療法が必ずしも一つとは限らないことだってあるし，僅かな手段しか残されていない場合も考えられる。その際，患者自身，あるいはその家族が病気に関するすべての情報を得て，自己の置かれている状況を把握し，冷静に対処することは決して容易なことではない。中途半端な説明では診断についての理解，治療法についての自己選択など困難であろう。診断と，複数の治療法について，すべて説明しましたから後はどれを選択するか自分で決めて下さい，と主治医に言われて困惑し，助けを求めてきた人たちも少なくはない。こうした場合はどうするか。癌の宣告を受けとめ，受諾するのに暫く日数を要するのが普通だろう。冷静になったところで，主治医からさらに詳しい説明を求め，治療法を決めるための情報を請求するに違いない。その癌について記載した書物をあたる人，相談に走る人など，さまざまである。前号で高井名誉教授が指摘したように，どういう医師を選ぶかも寿命のうちと言われるのもこのあたりの事情を語るものである。

最近では癌についての書物，雑誌も多数出版され，インターネットなども利用して，かなりの知識を得ることが出来る。これらの手段をもってしても，診断に納得出来ない，どの治療法が自らの病態に最適なのか判らない，副作用はどうか，最終的にはどうなるのか，いま，始めようとしている事業は中断するべきか，などなど，具体的な疑問が湧いたときにはどうすればよいのだろう。

アメリカでは患者は一番よい治療を受けようとする，という記事を読んだ。事情は日本でも同じだろうと思う。しかし，アメリカでは一番良い治療法を選ぶために自分で頑張り，最後まで諦めない人が多い点が異なる。患者の努力を支えるカウンセラーもいるし，治療に当たる病院の情報も公開されている。ターミナルケアの施設もよく整備されている。日本では主治医にお任せします，という人が多いのが実状ではないか，と言われる。年々事態は改善され，よく理解したうえで主治医を選ぶ人が増えてはいるものの，大勢は，まだアメリカの域には達していないことが少なくない。主治医の説明に納得出来ず，さらに複数の医療施設を梯子する人を見ることも屡々である。受診した医師の間で意見の相違があれば患者を益々混乱に陥れ，結局は一番軽く，楽観的に語ってくれる医師の意見に頼る例も見受ける。そういう迷いが貴重な時間を浪費させ，治療を遅らせることを恐れる。

何故，日本ではアメリカのように患者の身になって診断，説明，治療が円滑に進まないのだろうか。幾つかの要因が考えられ，以下，それについて考察してみたい。

1．医師のパターナリズム

自分のことなのに人任せにしてしまう気質が日本人から抜けきらないことが基本にあるように思える。忙しそうにしている医師にあまり時

＊大阪癌研究会評議員　大阪府立羽曳野病院名誉院長

間を取ってはいけない，質問攻めにしては失礼だ，医師の気分を害するのではないか，と言った遠慮もあろう。それが医療については俺に任せておけ，という古くからの医師の考え方を助長してきたのではないだろうか。一方，医師の側から見れば，あまりにも多くの患者を抱えていて，質問に答える時間が制約され，不本意ながら十分な説明が出来ないこともある。説明に要した時間については現行の診療報酬制度では点数にならないという制度上の問題も大きい。

2．医療要員の問題

前項で指摘したように，医師には患者，あるいは家族に十分説明する時間的余裕がないことが多い。また，その不足を補うカウンセラーなどの職種も多くの病院で手薄であって，医師の手が足らない場合は看護婦がその任に当たっている。それが現実である。まして，最終的診断について説明を受けた結果，心理的に落ち込み，絶望的になった患者，辛い治療によって弱気になった患者を励まし，患者と一緒に闘う医療関係者のポストは確保されてはいない。医療経済は逼迫し，公的機関では人員増は望めないとあって，医療施設はどこも苦しく，問題は判っていても，将来の展望は決して明るいとは言えない。

3．医療問題についての情報の不足

一般向けの雑誌，書物が増えたけれども，それで十分とは言い難いし，インターネットもアメリカと比較すると普及が遅れている。したがって，得られる情報には限界がある。まして，特定の疾患に関する施設ごとの治療の質，成績には未だ手が付けられていない。辛うじて，病院機能評価機構の活躍で，一定以上の設備，患者サービスを有する病院が認定を受けるところまで漕ぎ着けたが，医療の成績までは評価が及ばない。

癌の診療には以上挙げた問題点の他にも改善すべきことが多いが，それらを一気に解決する特効薬はない。一般の患者の観点に立って，現状の改善に向けて役立つと思われる点を以下に挙げてみたい。

1）診断の確認

癌は一つの方法で診断されるのではなく，普通はいろいろな観点から診断される。症状，生化学，画像，病理などがその主なものである。自覚症状を除けば，どの方法も進歩が目覚ましく，何れも客観的に明確に出来る方法であるから，主治医に詳しい説明を求めて，確認するのがよい。それでも疑問が残れば主治医の了解のもとにデータを第三者に見て貰ったり，複数の専門家に意見を仰ぐことも出来る。良心的な医師であれば主治医がデータを貸し渋ることはない筈だ。黙って転医して，医療機関を梯子するよりは同じ検査を改めて受けるという重複が避けられるし，さらに詳しい検査が必要な場合でも前のデータが生きるので是非心がけて頂きたい。最近は，医療施設間の情報交換を促進する医療保険制度があるし，主治医にとっても専門家や，さらに整った機器を備えた医療機関によって自分が下した診断の確認が得られるよい機会にもなる。

2）病気を知ること

診断が決まればその病気についての正しい知識を持つのがよい。方法は幾らでもある。出来れば主治医に詳しく質問し，正確な知識を得ることが望ましい。本屋に駆けつけてもいいし，インターネットにアクセスする方法もあるけれども，自ずから限界がある。自己流の解釈は過大評価や過小評価に陥りやすい嫌いがあることに注意が必要である。

正しい知識は癌と闘う気力を養い，無用な恐怖を避けるためにも有用である。

3）治療法について知ること

癌の治療法として手術，放射線，化学療法，が現在の三本柱である。手術でも大がかりな方法もあれば，比較的侵襲の少ない内視鏡手術も普及した。これらの幾つかを組み合わせることも可能である。癌の性質，病態，病期によって，最適の治療法は個人によって異なり，後遺症も一様ではないから自分に適した方法が何か，何故その方法が選択されるのか，正確な知識を持

たねばならない。

4）医療機関の選択は慎重に

癌は専門家の合議で，患者の生活，職業，将来にも配慮して，治療法を決めるのが最良である。最初に受診した診療科で治療することが必ずしも最適の治療法とは限らない。外科を受診しても第一に切除手術が選ばれるとは限らず，放射線治療や化学療法が先行することも希ではない。その逆もある。何れにしても初回治療が大変重要で，大きな意味を持つことを認識して欲しい。初回治療の失敗，再発は次の治療手段の選択に制約を来たし，病態を難しくすることが普通である。

5）気力の充実と周囲の支援

癌は一旦発病するとその治療は一筋縄では行かないことが少なくない。治療中には辛い状態に置かれることもある。挫けず，諦めないで，自分自身が必ず治るんだという固い信念で対処し，気力を充実させて，癌と闘っていただきたい。ご家族も，周囲も，それを支えて頂くと一層効果的である。癌の種類や病期によっては疼痛が起こることがあるかも知れない。疼痛は辛く，気力を奪う結果になり勝ちであるが，最近はその制御が可能になったので徒に我慢することはない。主治医と相談するとよい。

癌は高齢社会にはつきものの病気といってよい。癌になりたくなければ，長生きするなと言われる所以である。それでも手を拱いているわけには行かない。原因となりうる因子が判っているものでは発病を避ける，禁煙など，いわゆる，一次予防が肝心であり，次に，早期に発見し，適切に治療することが大切である。本稿では，発病してしまった時，どのように対処すればよいか，患者さんのお世話する立場で癌と闘う方法を書き並べてみた。医療側の意見が表面に出ている謗りを受けるかもしれないが，癌に対処し，闘うための参考になれば幸いである。